

☒ 話すこと ☐ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIを練習のパートナー、教師を協働学習のファシリテーターとする役割分担の明確化

実証概要

<校数> 中学校:3校 <人数> 470名
<学年> 全学年 <アプリ> スピークバディ
<AI機能について>
AIバディと多様な場面設定による会話を通じて、話す技能を高める。AI及び生成AIが即時フィードバックを行う。生徒一人ひとりの英語のレベルや興味・関心にあった個別カリキュラムを自動作成し、学習者は自身の到達度を閲覧しながら効果的に学習を進めることができる。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AI×協働学習の「ベストミックス」授業モデル(公開授業)

外国人講師との対話に向け、質問力の向上を図る授業を実践した。生徒はAIによる即時フィードバックを通じて、意欲が向上し、発話への心理的障壁が軽減された。教師は活動中の生徒の様子を見取り、中間指導で優れたモデルを共有し、クラス全体の学びを底上げした。また、3人1組のロールプレイに助言者を配置し、他者評価を通じてメタ認知能力を育成した。単なるAI学習に留めず、教師の機動的な介入と生徒同士の協働を組み合わせることで、翌日の実践につながる対話力を高める授業モデルを構築した。

実践成果の検証結果① (AI英語モデル校事業)

児童生徒の英語力の変化

AI英語アプリ使用者の使用回数と2回実施した英検IBAの「話すこと」の力の伸びとの関係を分析したところ、相関係数は0.23を示し、両者の間に弱い正の相関があることが確認された。この結果については、英検IBAの実施間隔が約4ヶ月半と短期間であったことが影響し、より顕著な相関があらわれるには至らなかったものと考えた。

生徒の関心・意欲の変化

生徒インタビューでは、「とっさに答えられない英語があることが分かり、勉強のきっかけになった」(モデル校3年)や、自らの意志で応用編を選んで学習を継続した事例(モデル校2年)など、生徒が自らの課題に気づき主体的に学ぶ姿勢が見られた。

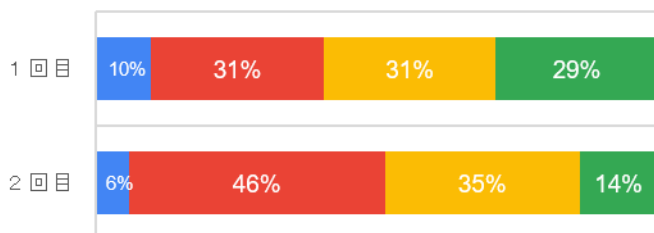
教師の指導の変化

生徒対象のアンケート結果によると、教師の声掛けがAI学習に役立っているという回答は、「あてはまる」と「ややあてはまる」を合わせた肯定的な回答が46%から58%へと大きく増加した。一方で「あてはまらない」とする否定的な回答は30%から18%へと減少した。AI英語アプリ導入により教師が生徒を伴走し支える存在へと変化したと考察できる。

実践成果の検証結果② 生徒アンケートから(1回目:10月 2回目:12月)

AI英語アプリを使用したことによって自分の英語に自信がついてきた。

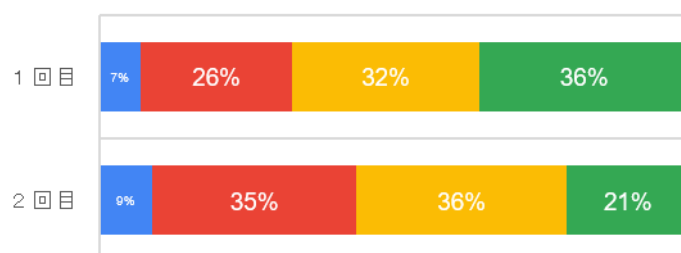
■ あてはまる ■ ややあてはまる
■ ややあてはまらない ■ あてはまらない



第1回調査で29%であった「あてはまらない」との回答が、第2回では14%へと15ポイント減少した。これに伴い、「あてはまる」および「ややあてはまる」の合計は41%から51%へと増加した。アプリでの反復練習による成功体験の積み重ねが、生徒の英語に対する自信や自己効力感の向上に寄与しているものと考えた。

AI英語アプリを使用したことによって英語で話すことへの緊張が少なくなったと感じる。

■ あてはまる ■ ややあてはまる
■ ややあてはまらない ■ あてはまらない



「あてはまる」が7%から9%へ、「ややあてはまる」も増加し肯定層全体は33%から44%へ伸長した。一方「あてはまらない」は36%から21%へと大幅に減少した。AIとの対話という心理的安全性の高い練習環境が、英語を発することへの抵抗感や緊張感の低減に有効であったものと考えた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●AI英語活用リーダーの情報交換の体制づくり

AIによる発信力強化と指導の最適化の検証を目的にリーダーを育成した。有識者の助言や定期協議を通じ、知見を「声掛けモデル」等の成果物へ集約した。公開授業を経て、組織的な指導改善と効果的活用ノウハウの構築を実現した。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

●事業全体を通じた成果と課題

AIアプリ活用で疑似対話体験が可能となり発話機会と学習効率が向上した。一方で教師との直接的な交流減少が懸念された。公開授業のような教師が対話を広げるモデルを示し対面での対話のより一層の拡充を目指し続けることが課題である。